万葉語「フルサト」の位相

――大伴家関係歌を手がかりとして――

上野　誠*

はじめに
一、予備的考察
二、「フルサト」と「フリニシサト」と
三、「フルサト」と「ヒナ」と
四、「ヒナ」と「ヰナカ」と「フルサト」と
五、大伴旅人の望郷歌から
六、大伴坂上郎女の「フルサト」
七、大伴家持の「フリニシサト」
おわりに

はじめに

本稿では、万葉語「フルサト」の「使われざま」を作品に沿って理解しながら、万葉語「フルサト」がどのような位相関係によって成り立っているのかを明らかにしたい。そして、明らかにされたその「使われざま」が、『万葉集』という文芸の特質とどのように結びついているのか、以下考えてみたいと思う。

一、予備的考察

『伊勢物語』の冒頭第一段の舞台は、「奈良の京春日の里」に設定されている。「男」はその初冠（成人式）にあたり、春日の里で狩を行なっているのである。古代における狩は、遊興というよりも〈儀礼〉というに近い性格をもっており、狩が男子の成人式の場として機能していることも考慮に入れて初段を読む必要があるのである。柿本人麻呂の「安騎野遊猟歌」（『万葉集』巻一の四五～四九）の狩が、軽皇子の成人式であることは、現在多くの万葉研究者に共有された理解となっている。この安騎野で軽皇子は、今は亡き父・日並皇子に思いを馳せているのである。日並皇子舎人慟傷歌群に「けころもを春冬かた設けて　幸しし宇陀の大野は思ほえむかも」（巻二の一九一）とあるように、安騎野・宇陀の地は父に所縁の土地であったといえよう。父が狩をした場所で、子が狩をし、成人を迎えているのである。大人社会の仲間入りにあたっては青年戒が授けられるが、父祖所縁の地こそ、もっともその場所にふさわしいのではなかろうか。

むかし、男初冠して、奈良の京春日の里に、しるよしして、狩

平成7年9月9日受理
*文学部国文学研究室

りにいにけり。その里に、いとなまめいたる女はらからすみけり。この男かいまみてけり。思ほえず、ふる里にいとはしたなくてありければ、心地まどひにけり。男の、着たりける狩衣の裾をきりて、歌を書きてやる。その男、信夫摺りの狩衣をなむ着たりける。

春日野の若むらさきのすりごろもしのぶの乱れかぎりしられず

となむおひつきていひやりける。ついでおもしろきこととともや思ひけむ。

みちのくのしのぶもぢずりたれゆゑにみだれそめにしわれならなくに

といふ歌の心ばえなり。昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける。

（『伊勢物語』第一段）

「しるよしして、狩りにいにけり」の「しる」は、「領有」あるいは「知る」の意味が推定されるが、おそらくなんらかのかたちで平安京遷都後にも、「男」は春日の里に「しるよし」、つまり〈所縁〉があったのだろう。

第一段の男が在原業平であることはいうまでもないが、フィクションたる「物語」に在原業平の伝記的事実を注入して「物語」を理解することには、注意も必要である。[1] あえて今、その禁を侵すと、業平の父は阿保親王であり、親王の父は平城天皇であるという歴史的事実に突き当たる。平城天皇は病気のため位を弟嵯峨天皇に譲るが、平城太上天皇の重祚を企てる藤原薬子・仲成が、旧都・平城京に新宮を建てて平城太上天皇の復位を企てようとした事件があった（薬子の変）。時に弘仁元年（八一〇）のことである。つまり、業平の祖父は漢風諡号の示すとおり、平城京復帰を企てた人物であり、奈良に所縁の深い人物なのである。こうした旧都復帰・平城太上天皇復位運動の失敗の結果、祖父・平城太上天皇は奈良に崩御まで留めおかれ、[2] 父・阿保親王は大宰員外帥に左遷されることとなる。天長元年（八二四）に平城太上天皇は崩御し、太上天皇崩御にともなう恩赦によって阿保親王は平安京に帰京することとなるのだが、業平はその翌年にこの世に生を受けているのである。

とすれば、業平にとっての奈良とは何であったのか。業平には、旧都・平城京に住んだという経験もない。あえていうなら、そこは父祖所縁の地ということができよう。その「奈良の京春日の里」を『伊勢物語』は「ふる里」と表現しているのであり、「ふる里」なる地には似つかわしくないほどの「いとなまめいたる」美人姉妹との出会いが、『伊勢物語』の冒頭を飾る話となっていることに注目したい。そして、この「ふる里」でのみごとな歌の贈答が、「昔人」の「いちはやきみやび」として、物語の語り手によって賞賛されているのである。続く第二段には「平城の京は離れ、この京は人の家まださだまらざりける時に…」とあって、新都と旧都の間に挟まれた時代に物語の「舞台」が設定されている。

以上のように『伊勢物語』は、生活基盤の一端をいまだ旧都・平城京に残している平安初期の貴族の心情の一斑を伝えているといえるだろう。そして、「男」に在原業平の伝記を重ねあわせると、業平の成

人の儀礼たる狩が、父祖の地たる「ふる里」「春日」で行なわれたのも、「故」あることと思われてくるのである。

二、「フルサト」と「フリニシサト」と

以上の予備的考察を踏まえ、万葉語「フルサト」に考察を加えてみたい。それには、まず現時点での研究の水準を表す辞典と注釈書を紐解くべきであろう。『時代別国語大辞典上代編』には、

ふるさと【古郷・故郷】（名）故郷。昔から一族が住んできたところ。古くから親しんだ里。

〔上代語辞典編修委員会編　一九六七年〕

とあり、上代語では出生地でなくても、「フルサト」の語を用いることが指摘されている。出生地でなくても「フルサト」という言い方をするのは、現代語と変わりがないといえるが、漢語「故郷」は原則として出生地である〔諸橋　一九五七年〕。次に、『万葉集全注』巻四は万葉語としての「故郷」の使用法を以下のように整理している。

「故郷」の語は、歌・題詞・左注合わせて十五回見えるが、そのほとんどは平城遷都以後に既に古京となった飛鳥ないし藤原の地をさして言ったものである。天平十五年ないし十六年の久迩京当時の歌で、旧都となった平城を「故郷」といった例がふたつある…

〔木下　一九八三年〕

〔木下　一九八三年〕は、『万葉集』の「故郷」の用例の大勢を示したものとして支持される結論であろう（第1表・第2表参照）

以上の理解を前提として、「フリニシサト」について、考えてみたい。『万葉集』では第1表および第2表に見るごとく、「故郷」「古郷」という文字を「フルサト」とも「フリニシサト」とも訓読する。「故郷」「古郷」という漢語に、「フルサト」「フリニシサト」という訓が共有されているのである。五音の句のなかにある時には「故郷」「古郷」を「フリニシサト」とは当然訓めないから、その訓である「フルサト」「フリニシサト」に意味上の違いを万葉びとは感じていなかったとも結論づけることができるかもしれない。しかしながら、歌中の語として「フルサト」「フリニシサト」を比較した場合、「フリニシサト」には「ニ」（完了の助動詞）と「シ」（過去の助動詞）が「サト」との間に入ることによって、「古びた」「古くなってとり残された」とかいうマイナスの意味合いが生じることもあるようである。たとえば、田辺福麻呂の「春の日に、三香原の荒れたる墟を悲傷びて作る歌一首」では、

三香原　久迩の宮は　山高く　川の瀬清し　住よしと　人は言へども　ありよしとわれは思へど　古りにし　里にしあれば　国見れど　人も通はず　里見れば　家も荒れたり…（巻六の一〇五九）

と表現している。この例は「古りにし」と「里」が二句にまたがる例であるが、助動詞を介することによって「フル」と「サト」の密着度が弱くなっているとも考えられよう。その「古りにし　里」と表現される久迩の宮の荒廃した景観を、福麻呂は右のように歌っているのである。加えて、同様に考えることのできる例としては、巻十一の「正

述心緒」に次のような歌がある。

人もなき古りにし里に妹を置きて　われ寝ねかねつ夢に見えこそ
（巻十一の二五六〇）

この歌では、寒村としての「古りにし里」が歌われているのである。「フルサト」という語には心理的距離の近さを、「フリニシサト」という語にはその遠さを看取するのは、筆者の思い過ごしであろうか。もちろん、当該歌は心理的に遠く感じる所にいる「妹」であるが故に、恋しさもつのると歌っているのだろう。こういった心理的距離ということを考える上での好例としては、有名な天武天皇と藤原夫人との問答歌がある。

天皇、藤原夫人に賜ふ御歌一首

わが里に大雪降れり　大原の古にし里にふらまくは後

藤原夫人の和せ奉る歌一首

わが丘のおかみに言ひて降らしめし雪のくだけし　そこに散りけむ
（巻二の一〇三・一〇四）

この「わが里」は天皇正宮のある飛鳥を指していることは間違いなく、それに対して大原を「古りにし里」と表現しているのである。飛鳥と大原とは境を接する＜ココ＞と＜ソコ＞との関係であろうが、藤原夫人も「わが里」に対応させて「わが丘」と表現していることを考え合わせると、この問答では二人の居所の違いをわざと強調している。当該歌の掛け合いのおもしろさは、互いに近接した場所にいながら、自らの居所を「わが里」「わが丘」と持ちあげて、相手のいる場所を逆にこきおろして揶揄するところにあるものと思われる。すなわち、一〇三番歌の「古りにし里」には、「古びた」という言い方で相手をつっ突いて＜挑発＞＜攻撃＞する意味合いが込められているのである。つまり、当該一〇三番歌の歌中の言葉として「フリニシサト」は「フルサト」と置き換え不可能というべきであろう。こういった「フリニシサト」の歌中での用い方に対して、「フルサト」なる語が物理的に存在する距離を埋める表現として用いられることもある。

高丘河内連の歌二首

ふるさとは遠くもあらず　一重山越ゆるがからに　思ひぞわがせし
わが背子は二人しをれば　山高み　里には月は照らずともよし
（巻六の一〇三八・一〇三九）

一〇三八番歌は久迩京から山を隔てた平城京に対して、「ふるさとは遠くない」と呼びかけているのであり、一重の山を越えるだけだと歌っているのである。ここでは平城京を「フルサト」として表現することによって、物理的距離を埋めようとしているように思われる。蛇足ながら、「一重山越ゆるがからに」は佐保・奈良・相楽などの奈良盆地北辺の山を想起しての表現と考えてよい。

一〇四番歌では「フリニシサト」という表現を用いることによって物理的に近い距離を心理的に遠いものとして表現しているといえるだろう。反対に、一〇三八番歌は二者の距離を縮めようとして「フルサト」なる語で表現したものと見ることはできないだろうか。

以上のごとく万葉語「フルサト」と「フリニシサト」を比較してみ

ると、「フルサト」は常になつかしきもの、よきものとして表現されているといえるだろう。加えて、重要なこととしては、歌中の「フルサト」の景観には荒廃した姿はないということである。これに対して、「フリニシサト」は、時としてさびれた場所や荒廃したと感じられる場所に対しても用いられているのである。

三、「フルサト」と「ヒナ」と

『万葉集』のヒナは二十八例中、二十四例が「天ざかるヒナ」の用例であり、天から離れたところが「ヒナ」である。ただ、この場合の「天」は、「天」といっても大君のいます都の上空の「天」と見なければならないことは〔金井　一九八七年〕が述べるとおりであり、都を中心としての周縁が万葉語の「ヒナ」と見て差し支えがない。ちなみに、万葉歌ではどんなところが、ヒナと呼ばれているかというと、近江（巻一の二九）・明石以西（巻三の二五五）・石見（巻二の二二七）・土佐（巻六の一〇一九）・越（巻十七の四〇一一）・筑紫（巻四の五〇九）・対馬（巻十五の三六九八）などをあげることができる。こうしてみると、この中に「畿内」は一例も含まれていない。都が畿の外である近江に遷ることについては人麻呂が、「近江荒都歌」のなかで、

…いかさまに　思ほしめせか〔或は云ふ、空にみつ大和をおきあをによし奈良山越えて〕　天離る　ひなにはあれど　石走る　近江の国の　ささなみの　大津の宮に…　（巻一の二九）

と表現している。歌の表現として誇張されているとしても、都が畿内から離れることが、大きな衝撃を持って捉えられていたことは想像にかたくない。近年の歴史学の畿内制研究の大きな成果としては〔大津一九九三年〕があるが、このなかで大津は原則として律令官人は畿内の氏族出身者であり、貴族たる五位以上の官人が、地方官としての赴任以外で畿外に出ることは無かったことを説いている。[3] 大津はこういったところから畿内・畿外の間には大きな文化的差異や経済的格差があったことを指摘している。この落差が都の優越として捉えられ、都・畿内に対する「ヒナ」として理解されたものと見ることができよう。早くに〔中西　一九六八年〕が指摘しているように『万葉集』中、仮名書きの「比奈」の用字例を除くとすべて「夷」の字が用いられており、ここにも優越と蔑視の位相を読み取ることができるのである。「夷」とはすなわち「夷蛮戎狄」の「夷」（東方の異民族）であり、中華思想に基づく＜化外の民＞を指すが、こういった文字づかいによっても『万葉集』という文芸の担い手が、畿内に居住する氏族出身の律令官人であったことを見て取れるのである。つまり、万葉語「ヒナ」は都・畿内対する概念であり、中心と周縁のごときものとして理解すべきことがわかる。しかも、それは経済的・文化的な格差と差異を前提としており、「優越」「劣等」の基準を内包した概念であることも、考慮に入れる必要があるだろう。[4] 都の文化という点に関しては、次の歌を参考にして考えてみたい。山上憶良が、大伴旅人に都への帰任を訴える「敢へて私の懐を布ぶる歌三首」には、

天ざかる夷に五年住ひつつ　都のてぶり忘らえにけり

（巻五の八八〇）

とある。憶良は当該歌で、筑紫を「ヒナ」であると断じているわけであるが、「都のてぶり」とは都びとの「風俗」「立ち居振る舞い」などのことであり、このような文化的差異も「天ざかるひな」には存在するわけである。しかし、題詞に「敢へて私の懐を布ぶる」とあるように、こういった「ヒナ」に対する意識は、官人たる者が公にすることは、はばかられることであったと思われる。[5]

やすみししわご大王の食国は大和も此処も同じとぞ思ふ

（大伴旅人　巻六の九五六）

あしひきの　山坂越えて　行き変る　年の緒長く　しなざかる
越にし住めば　大王の　敷きます国は　都をも　ここも同じと
心には　思ふものから…　（大伴家持　巻十九の四一五四）

天ざかる　夷としあれば　そこここも　同じ心ぞ　家ざかり　年
の経ぬれば　うつせみは　物思しげし…

（大伴家持　巻十九の四一八九）

つまり、官人として正面から尋ねられれば、「大和も此処も同じとぞ思ふ」と「タテマエ」で答えるが、一方では断ちがたい帰京へ思いが「ホンネ」として、存在しているのだろう。父・旅人の九五六番歌に学んだと見られる家持の長歌には〔大久保　一九九五年〕、傍線部のような華々しい出だしに引き続いて、自らが「ヒナ」にあることの忸怩たる思いと望郷の念が歌われている。

「ヒナ」が都を中心としてその周縁に位置付けられる感覚であり、畿外への旅によって自覚されるものであることは、縷々述べてきた。これに対して、「フルサト」「フリニシサト」は畿内における貴族の出身地・居所・本貫地についていう言葉であると断定してよいだろう。こういった万葉語としての使用法は、『万葉集』という歌集の成り立ちそのものに規制されるものであると考えられるのである。万葉歌の担い手（作歌・享受・伝承とも）が、畿内出身の律令官人であるかぎり、「フルサト」「フリニシサト」が畿外にあることはありえず、[6] 万葉びとから見れば畿外は「ヒナ」（＝化外の地）であったと思われる。ただし、これも「タテマエ」としての〈官人意識〉に立てば、「食国」「大王の敷きます国」の内であり、差はないということになる。

四、「ヒナ」と「キナカ」と「フルサト」と

「ヒナ」に続いて、差異を明確にしておかなければならない語に「キナカ」がある。[7] しかしながら、「キナカ」の用例は集中一例しかない。

式部卿藤原宇合卿、難波の都を改め造らしめらるる時作る歌一首

昔こそ難波ゐなかと言はれけめ今は都引き都びにけり

（巻三の三一二）

第二句の「難波ゐなか」という言い方が、奇異にも感じられるが、沢瀉『注釈』が説いたように「『難波ゐなか』は難波は田舎なり、の意ではなく、難波といふゐなか、難波のゐなか、といふやうな意で熟合

した語と見るべきである」というのが、正鵠を得ていると思われる。つまり、「昔」は「難波という田舎」といわれたが、「今」は「都び」たぞと訴えたいのである。藤原宇合は神亀三年（七二六）に「知造難波宮事」に任官されており、新宮造営の責任者の「自信」あるいは「慶び」のようなものが、この歌にはあらわれていると見てよい。「都引き」という表現から、平城宮の景観を引き移した難波宮の雄姿を偲ぶことができるのだが、「昔」と「今」に対比されるべきものは、宮として備えるべき景観といえるだろう。[8] 孤例で、語の意味を忖度することは危険きわまりないが、以下のような差異化は成り立たないだろうか。「ヰナカ」が難波新宮造営にともなう景観の変化に基づいて使用されたとするならば、建物の造営によって解消されるような性格を持っているともいえよう。これに対して、「ヒナ」は埋めがたい文化の違いとして認識されており（「夷」）、人為的に解消されるべき性格のものではないと考えてよいのではなかろうか。[9]

ここで、「フルサト」「フリニシサト」「ヒナ」「ヰナカ」について簡単に整理をしておこう。「フルサト」「フリニシサト」は旧都・出生地・本貫地・居所に対する言葉であり、万葉歌の担い手たる律令官人のそれは原則として畿内に限定されている。このことが、万葉語としての「フルサト」「フリニシサト」が指示する土地が畿内、なかんずく奈良盆地の古代宮都周辺に集中する原因ともなっている。対して「ヒナ」は、都・畿内を中心においてその他の地方を周縁に位置付ける表現であり、＜優越＞＜蔑視＞の位相関係において成り立つ語である。繰り返しとなるが、都以外の土地を「ヰナカ」と呼ぶことは、「ヒナ」と共通しているものの、万葉語「ヰナカ」は景観の変化について用いられており、建物の造営などによって人為的に「差」が解消できるものである。ところが、「ヒナ」は異なった文化を持つ地域として認識されており、「差」ではなく「違い」であるから、人為的に解消はできないものと見ることができよう。[10]

以上のような差異化した万葉語の整理に立って、以下「フルサト」の内実について考えてみようと思う。「フルサト」の内実を考究するにあたり、注目したいのは『万葉集』中の大伴家関係歌についてである。大伴家関係歌の比較によって、「フルサト」の内実を探ろうとしたのは、ほかでもなく『万葉集』に一族の歌が多く残されているからであり、さらにはその記載によって大伴氏という氏族の歩んだライフ・ヒストリーをある程度、復元できるからである。国史たる『続紀』は原則として五位以上の官人の動向を記すが、記載の内容の多くは任官記事であって、それらの記載によって氏族のライフ・ヒストリーを復元することは極めて難しい。ここでは、大伴氏のライフ・ヒストリーと歌の表現を重ね合わせながら、「フルサト」という語の内実を考えてみたいと思う。

五、大伴旅人の望郷歌から

『懐風藻』が記す没年から逆算すると、大伴旅人の生年は天智四年（六六五）となる。壬申の乱は八歳の時、平城遷都は四十六歳の時と

いうことになり、天平三年（七三一）に六十七歳で没しているのである。『万葉集』は神亀元年（七二四）から没年までの作品を伝えるから、『万葉集』に登場する旅人は時に六十歳。我々が目にすることのできる旅人の作品は、すべて老境の作となる。老境に入っての大宰府赴任で、旅人は多くの望郷歌を生み出してゆく。こうした資料上の制約があるので、旅人を「老い」と「望郷」の詩人と規定してしまうのは、彼にとってはかわいそうな気もするのだが、その旅人が歌の中で思いを馳せた土地はどこか、以下考えてみたい。

まずは旅人の作品のなかから望郷の対象となる土地を、機械的に拾ってみることにしよう。

奈良の都　巻三の三三一・巻五の八〇六・巻五の八四八・巻八の一六三九

飛鳥関係　巻三の三三四（香具山）・巻六の九六九（カムナビ）・巻六の九七〇（栗栖小野）

吉野関係　巻三の三三二（象の小川）・巻三の三三五（夢のわだ）・巻六の九六〇（吉野の滝）

「奈良の都」は当然のこととして、平城京内に班給された邸宅、およびその京の隣接地の邸宅をさすと思われる。次に飛鳥はどうか。これは、旅人の閲歴からみて四十六歳までの飛鳥での居住の経験を背景としていると考えることができる。吉野については若き日の吉野行幸従駕の追憶と考えて大過ないだろう。そこで、これらの地に対して旅人はどのような意識を持っていたのか、今度は作品に即して考えてみたい。そのために、巻三の「帥大伴卿の歌五首」を中心に観察を進めてみようと思う。

大宰少弐小野老朝臣の歌一首

A　あをによし奈良の都は　咲く花の薫ふがごとく今盛りなり

防人司佑大伴四綱の歌二首

B　やすみししわが大王の敷きませる国の内には都し思ほゆ

C　藤波の花は盛りになりにけり　奈良の都を思ほすや君

帥大伴卿の歌五首

D　わが盛りまた変若めやも　ほとほとに　奈良の都を見ずかなりなむ　（⇩奈良の都）

E　わが命も常にあらぬか　昔見し象の小川を行きて見むため　（⇩吉野）

F　浅芽原つばらつばらにもの思へば　古にし里し思ほゆるかも

G　わすれ草わが紐に付く　香具山の古にし里を忘れむがため　（⇩飛鳥）

H　わが行きは久にはあらじ　夢のわだ　瀬にはならずて淵にあらむも　（⇩吉野）

（巻三の三二八～三三五）

天平元年（七二九）頃の作と推定できるAからHが、すべて同一の宴席の歌であるかどうかは判断の岐れるところであろうが、契沖『代匠記』が説くごとく、Cの「君」は大伴旅人であり、Dがそれに答える歌であるということは、認めるべきであろう。[11] ところがCの歌に関す

る答えは、これで一応完結してしまっているのである。しかしながら、四綱の「奈良の都を思ほすや君」という問いかけは、旅人の「フルサト」への思いを大いに刺激したと見え、旅人の思いは「象の小川」「香具山」「夢のわだ」へと展開している。ここで重要なことは、旅人の望郷の思いがなぜこれらの場所に集約されてゆくのかということと、時間がどうして「過去」に遡ってしまうのかということである。[12]

Dの「奈良の都」から＜吉野＞＜香具山＞へとどうして追憶の対象が展開してゆくのかという問題に対しては、筆者の見るところ三つの分析の視点があるように思われる。一つは、記紀歌謡以来の望郷歌の伝統に根ざすものとして見る見方である。〔益田　一九六八年〕は、有名なヤマトタケルの「いのちの　全けむ人は　たたみこも　平群の山の…」の歌謡を取り上げ、「望郷がなじんだ土地への懐旧を超えて、＜生命の若き日＞への懐旧」となる歌謡の伝統があることを指摘。それを旅人が短歌世界に「流しこんだ」とする。なるほど、遠くに思い浮べる「フルサト」が、若き日の「フルサト」であるということは、理解できるところである。

さすれば、なぜ旅人の場合は、それが＜吉野＞と＜香具山＞か、ということが問題となろう。〔大濱　一九六五年〕は、＜吉野＞＜香具山＞が大伴氏の白鳳の繁栄と結びついていることを指摘している。大濱が「白鳳の繁栄」のように追想の対象を大きく捉えようとしたのに対して、より具体的に歴史的事実・事件として捉えようとする論考もある。〔渡瀬　一九八五年〕は、大伴吹負の＜飛鳥＞での奮戦に加え、大伴家の竹田庄（巻四の七六〇題詞）が壬申の乱の古場戦たる＜香具山＞と＜飛鳥＞を結ぶ中ツ道に接して存在していたことが、＜香具山＞への望郷の念の背景にあるとする。それならば＜吉野＞はどうか。＜吉野＞も同じく壬申の乱の故地であり、大伴氏にとっての＜吉野＞は特別な意味合いのある土地であったとする論考もある。〔菅野　一九九五年〕は、天智朝に冷遇されていた大伴氏が頭角を表すきっかけこそ、大海人皇子の檄に呼応した一族の大和での挙兵であり、「吉野の地は天武朝の出発点であると共に、大伴氏の栄光の幕明けの地」であったと説く。菅野の論考を受けた〔加藤　一九九五年b〕は、人麻呂の吉野讃歌（巻一の三八・三九）に見られるような「神の時代」を体現する＜吉野＞が旅人の脳裏にあったとする。つまり、これらの論考は旅人の追懐の内容を歴史的事項として把握しようとする論であるといえるだろう。

こういったなんらかの歴史的事項が追懐されたと見る見方に対して、〔鈴木　一九九〇年〕は、これを「古代的共同感情への回帰」とする。鈴木はE～Hに登場する土地がDの「奈良の都」同様に具体的叙述を伴っていないことに注目し、ここに登場する＜吉野＞＜香具山＞を「伝統的土地柄としての表象」であり、むしろ当該歌の＜吉野＞＜香具山＞は共同感情の発露であると説くのである。これも、一案であろう。

記紀歌謡以来の望郷歌の伝統と見る見方や、壬申の乱を契機とした一定の歴史的事項の懐古とみる見方、さらには望郷の念を持つ人びと

の共感をさそう共同感情の発露と見る見方があることなどを、ここでは縷々述べた。これらの考え方に対して、筆者は次のような私見をもっている。おそらく、旅人の脳裏にあったのは、壬申の乱を契機とする〈吉野〉〈飛鳥〉での氏族の栄光であったと、より具体的に考えておくべきであると思われる。けれども、当該旅人歌を宴席歌と見た場合、参会者と共有できない個人的追懐に終始することは、場に即していないわけで、個人的追懐の情を押さえたかたちで、漠然とした望郷の情をさそう〈吉野〉〈香具山〉の地名を挙げ、出席者の共感を獲得しようとしたのではなかろうか。

その〈香具山〉がG歌では「フリニシサト」と表現されているのである。[13] FとGの密接な関わりを考慮に入れると、Fの「古にし里」も香具山の近辺、なかんずく飛鳥を中心に考えるべきであろう。FとGはともに飛鳥をさしており、その地を「古にし里」と詠んでいるのである。一人ひとりの個人的追懐の「フルサト」「フリニシサト」と、多くの万葉びとに共有されるそれが、『万葉集』中には共存しているといえるだろう。

さて、大宰府から平城京に戻った旅人は、「故郷を思ふ」歌を残している。

三年辛未、大納言大伴卿、寧楽の家に在りて故郷を思ふ歌二首

しましくも行きて見てしか　神名備の淵は浅せにて瀬にかなるらむ

指進の栗栖の小野の萩の花散らむ時にし行きて手向けむ

（巻六の九六九・九七〇）

旅人が天平三年（七三一）の七月二十五日に没したことを考えると、人生の終焉に見た幻影の故郷ともいえそうだが、それは読み手の思い入れに属する問題と思われる。神名備は、飛鳥のカムナビと考えてよく、奈良にあっては故郷の景の一つに飛鳥のカムナビを想起したことがわかる。「栗栖の小野」は未詳であるが、『和名抄』によって「大和国忍海郡栗栖郷」を比定するのも一案だろう。もちろん、旅人の出生地である可能性も否定できない。重要なことは、前掲のFとGの歌よりも、より具体的に「故郷」が叙述されている点である。しかも、作中に「行きて見てしか」「行きて手向けむ」と自己の願望・意志が明示されているのである〔針原　一九九四年〕。遠く大宰府にあっては「奈良の都」も家郷として憧憬した旅人ではあったが、「寧楽の家に在」っては〈飛鳥〉と〈栗栖の小野〉に望郷の念を抱いているのである。ここで注意したいのは、FとGよりも個人的追懐を強く表に出した歌となっている点である。極言すれば、FとGが歌われた宴席に〈栗栖の小野〉を出したとしても、参会者の共感は得られなかったと思われる。

こうして見ると、「フルサト」「フリニシサト」に込められた望郷の念にも、さまざまなレベルがあることがわかる。《個人的追懐》の中の「フルサト」と、多くの享受者に《共有（共同）》される最大公約数のごときそれとがあるのである。

六、大伴坂上郎女の「フルサト」

大伴坂上郎女の生年については、天武三年（六七四）にまで遡らせる説を筆頭に、大宝元年（七〇一）まで下らせる説もあり、定見を見ない。[14] 消去法によって生年を絞り込んでゆくと、〔小野　一九七六年〕が説くように持統十年（六九六）から、大宝元年（七〇一）の間で考えるのが至当であろう。とすれば、平城遷都は八歳から十三歳までの間に起こった出来ごとであったと設定することができる。幼年あるいは少女期までの飛鳥・藤原での生活を想定してよいだろう。そんな坂上郎女の旧都と新都に対する思いを推し量ることのできる歌が巻六に伝わる。

大伴坂上郎女、元興寺の里を詠む歌一首

ふるさとの飛鳥はあれど　あをによし平城の明日香を見らくしよしも　（巻六の九九二）

「ふるさとの飛鳥」に対比される「平城の明日香」が詠み込まれていて、「ふるさとの飛鳥」は「アスカ」でよいけれど、「平城の明日香」を見るのもまたよいという割り切ったもの言いになっている歌である。おそらく、彼女の胸中には飛鳥に対する故郷追懐の情と、平城京生活者としての自覚・自負という、複雑な感情があったものと思われるが、そういった気持ちを整理しきったあとの感情の吐露であろう。察するに、それは「住めば、都」という気持ちの整理の仕方に近いものと考えられる。

当該歌中の「平城の明日香」とは、〔岸　一九七七年〕がいうように「元興寺、すなわち飛鳥寺のある地域をさしたもの」であり、平城京の下京に飛鳥寺が移転されている事実を念頭におく必要があろう。岸は下京に飛鳥の施設が移転されているところから、新益京（藤原京）に対する飛鳥京域の施設の移転地として平城京の下京を推定している。[15] こういった理由から出現した「もうひとつのアスカ」を坂上郎女は右のように詠んだわけである。≪平城のアスカ≫に対比される≪ふるさとのアスカ≫という意識の根底には、新旧二都での生活体験ということのほかに、大伴氏という氏族の生活基盤が、平城遷都後にも飛鳥・藤原の近辺にあったという事実が背景にある。大伴家の人びとは、平城遷都後も一方では「フルサト」の生活を大切にしていたのである。そういった大伴氏の生活の一端を垣間見ることのできる歌が、巻四に伝わっている。

大伴坂上郎女、跡見庄より、宅に留まれる

女子大嬢に賜ふ歌一首〔短歌を并せたり〕

常世にと　わが行かなくに　小金門に　もの悲しらに　思へりし
わが子の刀自を　ぬばたまの　夜昼と言はず　思ふにし　わが身
は痩せぬ　嘆くにし　袖さへ濡れぬ　かくばかり　もとなし恋ば
ふるさとに　この月ごろも　ありかつましじ

反歌

朝髪の思ひ乱れて　かくばかりなねが恋ふれぞ　夢に見えける

右の歌は、大嬢の進る歌に報へ賜ふなり　（巻四の七二三・七二四）

題詞の「跡見庄」は、異説があるものの通説では桜井市街地東部の外山（とびやま）付近と理解されており、「竹田庄」（橿原市東竹田町に比定）とともに、平城遷都以降も大伴家の経済を支える「庄」であったと思われる。[16]『万葉集』には大伴家「左保の宅」（巻四の七二一題詞、巻八の一四四七左注）や「西の宅」（巻六の九七九題詞）の名が見えるが、それは平城京内かその近辺に存在していた邸宅であり、当該歌は奈良朝貴族の「宅」と「庄」の実態を知る希有の資料でもある。これらの「庄」は、飛鳥・藤原の宮都の時代に形成されたと考えられるが、平城遷都以降も大伴家に伝領されていて、農繁期などには「庄」に留まる必要があったのである。当該歌中に「この月ごろも」という表現があるところを見ると、数カ月単位での「庄」での生活があったものと考えられよう。大伴坂上郎女は十八歳の娘・坂上大嬢を平城京の「宅」に残して、「庄」に下向しなければならなかったのであり、〔薗田　一九五三年〕が早くに説いたように、万葉時代の貴族は京内の「宅」と京外の本貫地を行き来する二重生活者であったと見ることができるのである。坂上郎女の「庄」下向に際して、娘・大嬢は不安な面持ちを見せたのだろう。そして、それは大伴坂上郎女の脳裏から離れなかったのである。娘の姿は夢にまで表れている。大嬢は十八歳になっているとはいえ、子を思う母の押さえがたい気持ちが表れた作品である。[17]こうした「宅」と「庄」の生活の距離を埋めるものとして、書簡の往来があったことは左注によってわかるが、『万葉集』は奈良朝に生きた母娘のやりとりの一端を現在に伝えているのである。

奈良朝においては、貴族・官人といえども程度の差こそあれ、農事に携わっていた証左がある。養老假寧令第一条には、農繁期の「田假」に関する規定があり、京内の官人には五月と八月に「田假」と呼ばれる休暇が保証されていたことがわかるのである。

凡そ在京の諸司には、六日毎に、並に休暇一日給へ。中務、宮内、供奉の諸司、及び五衛府には、別に假五日給へ。百官の例に依らず。五月、八月には田假給へ。分ちて両番を為れ。各十五日。其れ風土宜しきを異にして、種収等からずは、通ひて便に随ひて給へ。外官は此の限りに在らず。

〔井上他　一九七六年〕

家刀自として大伴家を支える大伴坂上郎女は、農繁期には「庄」での生活を送ったのであった。実際に農作業に従事したかどうかはわからないが、そこに立ち合う義務はあったようであり、左のような歌が巻八に伝わっている。

大伴坂上郎女、竹田庄にして作る歌二首

然とあらぬ五百代小田を刈り乱り　田廬に居れば都し思ほゆ

〔第二首省略〕　（巻八の一五九二）

九九二番歌では「フルサトのアスカ」も「平城京のアスカ」も同じであると歌っているのに対して、この歌では「都し思ほゆ」と都への切ない思いが述べられている。

以上述べたごとく、京内の「宅」から離れた京外の「庄」での生活を背景に七二三・七二四番歌は生まれているのであり、ここで「跡見

庄」のことが「フルサト」と表現されていることには、注意を払わなければならない。「竹田庄」は広義の飛鳥域内にあると思われるが、そこからさらに離れた「跡見庄」についても、「フルサト」と呼ぶのはどうしてだろうか。もちろん、平城京から見れば〈竹田〉〈跡見〉も旧京の内あるいは周辺として認識されるかもしれないが、父祖伝来の「庄」であり、自らの本貫の地だからこそ、坂上郎女は家刀自として「跡見庄」を「フルサト」と呼称したのではなかろうか。ところが、そうはいっても娘との別離の苦しみは覆いようがない。そんな気持ちの揺れが「かくばかり　もとなし恋ば　ふるさとに　この月ごろもありかつましじ」という表現の背景にはあるのだろう。この部分に、父祖伝来の「庄」たる「フルサト」にいるはずなのに「(娘を残して)数カ月もいることは絶えられない」という、「家守る刀自」と「母」の間にゆれる坂上郎女の心情を慮ることができると思われる。

七、大伴家持と「フリニシサト」

大伴家持の生年の比定については、『公卿補任』の記載の検討を通して比定する方法と、内舎人出仕の年令を当時の官人出身法から推定し、年令を逆算して比定する方法とがある。近時の史学における官人出身法の研究成果を取り入れた優れた論考としては〔佐藤　一九八三年〕があり、養老二年（七一八）説を採っている。現今の諸説の中でもっとも精度の高い比定法による結論だろう。とすれば、家持は平城京の子ということができる。もちろん、前述のように父祖伝来の「庄」での生活も経験したと思われるが、家持には飛鳥・藤原の「古京」での生活経験はない。この点が、新旧二都の生活経験のある大伴旅人・坂上郎女とはまったく違うところである。

天平十二年（七四〇）十二月、聖武天皇は二カ月に及ぶ彷徨の末、久迩の宮に入り、ここに京を建設しようとする。こういった事情から、大伴家の人びとの奈良「宅」と久迩の新都の「宅」との二重生活も始まる。家持と書持とのやりとり（巻十七の三九〇九～三九一三）や、家持と坂上大嬢とのやりとり（巻四の七七〇～七七四、巻八の一四六四、一六三二）が、その一端を現在に伝えているといえるだろう。久迩の新都と奈良の旧都の間で取り交わされた作品の中に、旧都を「フリニシサト」と表現しているものがある。

大伴宿祢家持、紀女郎に贈る歌一首

鶉鳴く古にし里ゆ思へども　何ぞも妹に会ふよしもなき

紀女郎、家持に報へ贈る歌一首

言出しは誰が言なるか　小山田の苗代水の中淀にして

（巻四の七七五・七七六）

久迩京にいる家持は、紀女郎のいる奈良を「鶉鳴古りにし里」と呼んでいる。しかしながら、家持の「宅」も奈良に残っているのであり、宮都としての整備もままならなかった久迩京から[16]、長年住み現在も自らの「宅」の残っている奈良を「フリニシサト」と表現しているのは、どういう理由からなのだろうか。前掲の「高丘河内連の歌」では、久迩京から平城京に対して「フルサト」と呼び掛けていた。造営の進捗

状況やその景観はどうであれ、新都から見れば、そこは「フルサト」「フリニシサト」なのだろう。

ただ家持が、「フルサト」ではなく、あえて「フリニシサト」と使ったのには、前述の巻二の一〇三番歌で天武天皇が藤原夫人に対して見せたような挑発的意味合いが込められているものと見たい。「古びた里のことは気に掛けているが、今は逢うことができない」と家持はいっているのである。当然、家持は反撃を食らっている。「あなたから言い寄ってきたのに、今は二人の仲が中だるみになっていますね」と紀女郎は応じているのである。

天平も十年代に入ると飛鳥古京での生活体験のない世代が中心となってくる。こうした段階において、久迩の新京から奈良を「フルサト」「フリニシサト」と呼び掛けていることに、まずは注意を払わねばならないだろう。もう一つ重要なこととしては、都が移動してしまえば、簡単に旧都は「フルサト」「フリニシサト」になってしまうということである。たとえ、新都が造営中であり、旧都に「宅」が残っていてもである。おそらく、万葉語の「フルサト」「フリニシサト」には、新都に対する「フル」の意味合いが感じられていて、新都と旧都の関係においてこの言葉を使用することもあったと思われるのである。このことは「フルキミヤコ」という言い回しにも通じており、田辺福麻呂の「寧楽の故りにし郷を悲しびて作る歌」の第二反歌では「立ちかはり古き都となりぬれば…」（巻六の一〇四八）と平城京のことを表現している（第3表参照）。

おわりに

万葉語の「フルサト」「フリニシサト」が、飛鳥・藤原の旧都を中心としてその域内にある出生地・本貫地・居所に対して用いられていることの内実について、本稿では考えてみた。その考察の前提として「ヒナ」「キナカ」といった万葉語との差異化を意図的に行ない、万葉語としての「フルサト」がどういった位相関係の上で使用されているのかを考えてみたつもりである。

しかし、個別に作品にあたってゆくと、当然のことながら、その「使われざま」には諸相がある。「新都」に対比される「旧都」であったり、父祖伝来の「庄」に対しての思い入れが見て取れたり、「個」を束ねる共同感情の発露の場として「フルサト」が選ばれたりという使用意識の諸相が見て取れるのである。「宅」と「庄」、あるいは「宅」と「宅」の歌のやりとりの中で、どういう基準に基づいて「フルサト」「フリニシサト」と使用しているか、その一端を考えたつもりである。また、歌を贈る相手の居所を「フリニシサト」と呼ぶ場合には、挑発的要素を含んでいることなどについても縷々述べた。

こういった万葉語「フルサト」の諸相は、万葉びとの文学的営為による演練の成果と見なければならないことは当然であるが、『万葉集』という文芸の担い手の生活史を抜きにして考察することは不可能であるとも思われる。「フルサト」が畿内なかんずく飛鳥・藤原の古京周辺に集中し、「ヒナ」が畿外に集中して二つが重なりあうところがないという事実は、『万葉集』という文芸の担い手が律令官人であるこ

との投影と見なければならないだろう。[19]

つまり、各個人の「フルサト」と、多くの万葉びとに共有される「フルサト」「フリニシサト」が『万葉集』には共存しているのである。本稿でも若干触れたように、共有される「フルサト」とは飛鳥・藤原の旧都であり、『万葉集』中において何のことわりもなく「フルサト」といえばこの地を指す。こういった飛鳥・藤原の旧都に人びとの心を収斂させる共同性の強い集中の「フルサト」については、他日を期して、考察を加えたいと思う。

《註》

(1) フィクションたる「物語」は、歴史的事実に依拠している場合と、そうでない場合があるが、どちらにせよ「物語」としての「完結した文脈」があるはずであり、安易に歴史的事実に「物語」を還元してしまうと、物語の正しい理解に行き着かない恐れが出てくると思われる。

(2) 奈良市法蓮町の不退転法輪寺（通称不退寺）は、平城天皇「萱の御所」跡との〈寺伝〉を持ち、平城天皇・阿保親王・在原業平所縁の寺として知られている。

(3) 〔大津　一九九三年〕がその根拠として挙げるのは、養老仮寧令第十一条請仮条「凡請仮、五衛府五位以上給三日、京官三位以上給五日、五位以上給十日。以外及欲出畿外奏聞。其非応奏、及六位以下、皆本司判給。応須奏、並官申聞。」である。

(4) 〔中西　一九六八年〕は、「夷」に込められた意識を、生い立ちの異なる文化（異文化）と見るべきことを説いている。

(5) 家持の官人意識の諸相については、〔小野　一九八〇年〕に詳細である。

(6) 畿内・都を中心に「フルサト」「フリニシサト」を考えるとして、さらにいえば「ヤマト」という狭い範囲に限定されてくるだろう。たとえば、難波行幸につき従った忍坂部乙麻呂は、「大和恋ひ眠の寝らえぬに　こころなくこの渚崎廻に鶴なくべしや」（巻一の七一）と歌っている。この歌から考えると、奈良盆地を核として、盆地内で見わたせる範囲くらいに考えてよいと思われる。こういった可視の範囲で万葉の望郷歌を考え、それを望郷歌の「大和中心主義」「和歌的風土の創造」として分析する論考に、〔神野　一九九一年〕がある。

(7) 「キナカ」の語源については定見を見ない。なお、語源説の整理については、沢瀉『注釈』が詳細である。

(8) 「昔」に対応させて「今」を歌中に詠み込むことは、漢詩文に多く、漢籍に学んだ表現であることについては〔小島　一九六四年〕に詳細である。

(9) 〔加藤　一九九五年〕は、東国が「天ざかる夷」という句を以て形容されないことの意味を説いている。氏によれば「東国は、都との対比において把握される土地ではなかった」といい、むしろ「異郷」に近い土地イメージが、律令官人にあったという。中心と周縁という理解に照らし合わすと、さらにその「外部」ということになろうか。もし、そうだとすれば、「外部」たる東国の歌がなにゆえに『万葉集』に巻十四として一巻を形成するのか、次なる疑問がわいてくる。

(10) 有名な「壬申の年の乱平定しぬる以後の歌二首」である「大王は神にしませば　赤駒の腹這ふ田居を　都となしつ」「大王は神にしませば　水鳥の集く水沼を　都となしつ」（巻十九の四二六〇・四二六一）の「赤駒の腹這ふ田居」「水鳥の集く水沼」と歌われる景観が万葉語の「キナカ」にふさわしいものと考える。つまり、大王の都の造営以前の景観こそ「キナカ」の景観ということができよう。

(11) 武田『全註釈』は、小野老歌（A）以下、三三五番歌（H）までが、同時の作とみている。『全註釈』の解釈をさらに推し進めた論考としては〔伊藤　一九七五年〕がある。伊藤は小野老歌（A）を「以下の歌々を導くための『事始め歌』」として見、大伴四綱歌（BC）が、それを受けるものと見る。その上で、三三五番歌（H）までのこの歌群に「連歌的構成」を認め、さらには波紋型の対応関係（〈EとH〉〈FとG〉）を認めている。

(12) 〔粂川　一九七六年〕は、こういった旅人作品における追懐の「時間」

の特質について、隆盛において衰退を予見し、衰退において隆盛を省みるという特質があることを説いている。

(13) 平城遷都後の香具山の様子が表現されている歌といえば、「鴨君足人の香具山の歌」（三巻の二五七～二六〇）がある。

(14) 坂上郎女の生年の諸説については、〔小野寺　一九九三年〕に網羅的整理がなされている。

(15) 〔岸　一九九三年〕は「このような外京がなぜ設定されたか、またその設定時期はいつかという問題については、そこに藤原京外にあった飛鳥寺や厩坂寺が移建されて、元興寺・興福寺として位置することになったという事実を除外して考えることはできないだろう」と述べている。

(16) 〔岸　一九六六年〕所収の有名な「大和における豪族分布図（第三図）」は、おそらく『万葉集』の跡見庄・竹田庄の記載とその比定地を勘案して、桜井市市街地東部・橿原市西部に大伴氏の勢力圏を図示している。

(17) 〔小野寺　一九九三年〕は、『万葉集』の「跡見庄」「竹田庄」関係歌が生まれた大伴坂上郎女の「庄」の滞在は天平十一年（七三九）の秋と推定する。もちろん、資料によって補捉できない「庄」下向も当然あるものと思われる。

(18) 「十五年癸未秋八月十六日、内舎人大伴宿祢家持、久迩の京を讃めて作る歌一首」には「今造る久迩の都は　山川の清けき見れば　うべ知らすらし」（巻六の一〇三七）とある。

(19) さらには、平城遷都後の飛鳥近辺にも「庄」のような生活基盤が残っていることを念頭におかねばならない。長屋王家跡の出土木簡の研究が進展して、王家の「御田」「御薗」が、飛鳥・藤原の近辺にもあり、平城京の邸宅との交流の姿が明らかになっている〔館野　一九九二年〕。なお、『万葉集』にあらわれる香具山宮や城上宮などの機能については〔上野　一九九五年b〕がある。

≪参考文献≫

浅野　則子　一九九四年　「＜環境＞としてのみやび」『大伴坂上郎女の研究』所収　翰林書房

伊藤　博　一九七五年　「古代の歌壇」『万葉集の表現と方法　上』所収　塙書房

——　一九七六年　「家と旅」『万葉集の表現と方法　下』所収　塙書房

井上他校注　一九七六年　『日本思想大系3　律令』岩波書店

上野　誠　一九九三年　「王権の論理」桜井満監修・並木宏衛他編『万葉集の民俗学』所収　おうふう

——　一九九五年a　「万葉カムナビ考——古代宮都とカムナビ信仰の起伏——」『山岳修験』第十五号所収　日本山岳修験学会

——　一九九五年b　「香具山と城上宮——『殯宮之時』挽歌と殯宮設営地——」『万葉』第一五五号所収　万葉学会

大久保広行　一九九四年　「離宮と大宰府」古橋信孝編『古代文学講座3　都と村』所収　勉誠社

——　一九九五年　「鄙にあること——旅人における時空意識——」『国語と国文学』第七十二巻第二号所収　東京大学国語国文学会

大津　透　一九九三年　『律令国家支配構造の研究』岩波書店

大濱厳比古　一九六五年　「老いと孤独と夢と〔旅人覚書その二〕」『山辺道』第十一号所収　天理大学国語国文学会

小野　寛　一九七六年　「大伴坂上郎女伝私考　その一」『学習院女子短期大学紀要』第十三号所収　学習院女子短期大学

——　一九八〇年　「大君の任のまにまに——家持の『ますらを』の発想——」『大伴家持研究』所収　笠間書院

小野寺静子　一九九三年　『大伴坂上郎女』翰林書房

梶川　信行　一九九四年　「旅と歌」古橋信孝編『古代文学講座5　旅と異郷』所収

加藤　静雄　一九九五年a　「天離らぬ夷」『森淳司博士古稀記念論集　万葉の課題』所収　森淳司博士古稀記念論集刊行会

——　一九九五年b　「昔見し象の小川」『同朋文学』第二十七号所収

金井　清一　一九八七年　同朋大学日本文学会
「柿本人麻呂――その『天』の用例、『天離』など――」和歌文学会編『論集　万葉集』所収　笠間書院

川口　常孝　一九七六年　『大伴家持』桜楓社

神野　富一　一九九一年　「舒明天皇と大和――和歌的風土の創造――」犬養孝編『万葉の風土と歌人』所収　雄山閣出版

神堀　忍　一九八一年　「平城京人と飛鳥」横田健一・網干善教編『飛鳥の歴史と文学②』所収　駸々堂

岸　俊男　一九六六年　「ワニ氏に関する基礎的研究」（『日本古代政治史研究』所収）塙書房

――　一九七七年　「万葉歌の歴史的背景」「宮都と木簡――よみがえる古代史――」所収　吉川弘文館

――　一九八四年　『古代宮都の探究』塙書房

――　一九八八年　『日本古代宮都の研究』岩波書店

――　一九九一年　『古代史からみた万葉歌』学生社

北村　優季　一九八六年　「京戸について」『史学雑誌』第九十三巻六号所収　東京大学史学会

鬼頭　清明　一九七七年　『日本古代都市論序説』法政大学出版局

――　一九九二年　『古代宮都の日々』校倉書房

木下　正俊　一九七六年　「飛鳥の神奈備」横田健一・網干善教編『飛鳥を考える1』所収　創元社

――　一九八三年　『万葉集全注』第四巻　有斐閣

清原　和義　一九九四年　「明日香への幻想」古橋信孝他編『古代文学講座3　都と村』所収　勉誠社

粂川　光樹　一九七六年　「試論・旅人の時間」万葉七曜会編『論集　上代文学』第六輯所収　笠間書院

小島　憲之　一九六四年　「万葉集と中国文学との交流――その概観――」「上代日本文学と中国文学　中――出典論を中心とする比較文学的考察――」所収　塙書房

木野村茂美　一九九五年　「大伴旅人と『望郷歌』――吉野の地を中心に――」「中京国文学」第十四号所収　中京大学国文学会

駒木　敏　一九九四年　「みやびとひなび――万葉集の宴席歌を通して――」古橋信孝他編『古代文学講座3　都と村』所収　勉誠社

佐藤美智子　一九八三年　「万葉集中の国守たち――大伴家持の内舎人から越中守時代について――」「万葉」第一一二号所収　万葉学会

上代語辞典編修委員会編　一九六七年　『時代別国語大辞典　上代編』三省堂

菅野　雅雄　一九九五年　「『藤波』の意味するもの――巻三『帥大伴卿歌五首』をめぐって――」森淳司博士古稀記念論集刊行会編『森淳司博士古稀記念論集　万葉の課題』所収　翰林書房

鈴木日出男　一九九〇年　「大伴旅人の方法」『古代和歌史論』所収　東京大学出版会

薗田　香融　一九五三年　「万葉貴族の生活圏――万葉集の歴史的背景――」「万葉」第八号所収　万葉学会

館野　和己　一九九二年　「長屋王木簡の舞台」宮川秀一編『日本史における　国家と社会』所収　思文閣出版

寺崎　保広　一九九五年　「古代都市論」岩波講座『日本通史』第五巻所収　岩波書店

戸谷　高明　一九八九年　『古代文学の天と日――その思想と表現――』新典社

中西　進　一九六八年　「夷」『万葉史の研究』所収　桜楓社

針原　孝之　一九九四年　「大伴旅人と故郷」古橋信孝他編『古代文学講座5　旅と異郷』所収　勉誠社

林田　正男　一九八二年　『万葉集筑紫歌群の研究』桜楓社

古橋　信孝　一九九四年　『古代都市の文芸生活』大修館書店

細川　純子　一九八九年　「ふる」古代語誌刊行会編『古代語誌　古代語を読むⅡ』所収　桜楓社
益田　勝美　一九六八年　「鄙に放たれた貴族」『火山列島の思想』所収　筑摩書房
諸橋　轍次　一九五七年　『大漢和辞典』第六巻　大修館書店
吉永　登　一九六九年　「＜古里の飛鳥＞と＜奈良の飛鳥＞」『万葉――通説を疑う』所収　創元社
渡瀬　昌忠　一九八五年　「宮都――人麻呂歌集略体歌の背景――」上代文学会編『万葉集の周辺』所収　笠間書院
――　一九九四年　「人麻呂と宮廷」古橋信孝他編『古代文学講座3　都と村』所収　勉誠社

〔付記〕本稿においては、漢語「故郷」「古郷」と和語「フルサト」「フリニシサト」との関係については全く考慮しなかった。他日を期して、この不備を補いたいと考えている。

第1表　『万葉集』における歌中の「フルサト」

歌句中の【フルサト】		備考
ふるさとに	古郷尓　／巻四の七二三　大伴坂上郎女	平城京の宅からみて、**跡見庄**を古郷と表現
ふるさとの	古郷之　／巻十の二二一六	**飛鳥**とみることも可能
	古郷之　／巻六の九九二　大伴坂上郎女	平城京の元興寺からみて、**飛鳥**を古郷と表現
	古郷之　／巻八の一五〇六　大伴田村大嬢	古郷である「奈良思丘」が所在未詳
	古郷之　／巻四の六二六　八代女王	平城京からみて、**飛鳥**を古郷と表現
	故郷之　／巻十の一九七一	**飛鳥**とみることも可能
	故郷之　／巻十の一九三七　古歌集	**飛鳥**を故郷と表現している
ふるさとは	故郷者　／巻六の一〇三八　高丘河内	久迩京からみて、**平城京**を故郷と表現
わがふるさとに	吾故郷尓　／巻四の六〇九　笠郎女	出生地とみることも、**飛鳥**とみることも可能

第2表　『万葉集』における歌中の「フリニシサト」

歌句中の【フリニシサト】		備考
ふりにしさとし	故郷之／巻三の三三三　大伴旅人	大宰府から、**飛鳥**を懐古して故郷と表現
ふりにしさとと	古郷跡／巻六の九二八　笠金村	孝徳・天武朝の**難波宮**を懐古して古郷と表現
ふりにしさとに	古郷／巻十一の二五八七	**飛鳥**の大原を古郷と表現
	古郷尓／巻十一の二五六〇	
	古尓之郷尓／巻二の一〇三　天武天皇	天皇宮（飛鳥浄御原宮）からみて、同じく飛鳥の藤原夫人の居所**大原**を古尓之郷と表現
ふりにしさとの	古郷之／巻十の二二八九	平城京からみて、**藤原**を古郷と表現
	古郷之／巻八の一五五八　沙弥尼等	平城京からみて、**飛鳥**を古郷と表現
ふりにしさとゆ	故郷従／巻四の七七五　大伴家持	久迩京からみて、**平城京**を故郷と表現
ふりにしさとを	故去之里乎／巻三の三三四　大伴旅人	大宰府から、**飛鳥**を懐古して故去之里と表現
※ふりにし／さとにしあれば	故去之里尓四有者／巻六の一〇五九　福麻呂歌集	宮都が難波・平城京に移り、旧都となった**久迩京**に対して故去之里と表現

第3表　『万葉集』における歌中の「フルキミヤコ」

歌句中の【フルキミヤコ】		備考
ふるきみやこと	古京跡／巻六の一〇四八　福麻呂歌集	久迩京からみて、**平城京**を古京と表現
ふるきみやこの	故王都／巻十三の三二三一　或本歌曰	平城京からみて、**藤原**を故王都と表現
ふるきみやこは	旧京師者／巻三の三二四　山部赤人	平城京からみて、**飛鳥**を旧京師と表現
ふるきみやこを	故京乎／巻一の三二　高市黒人	飛鳥からみて、**近江大津宮**を故京と表現
	旧都乎／巻三の三〇五　高市黒人 或本小弁	飛鳥からみて、**近江大津宮**を旧京と表現

The Phase of the Mannyo word "Furusato"
— Concerning the works by Otomo family —

Makoto UENO